
指霧

遠矢近刀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

指霧

【Nコード】

N7049R

【作者名】

遠矢近刀

【あらすじ】

父親が交通事故で死んだ日から、黒い霧が人の形を象った、シヤドーマンみたいなものが見えるようになった現在高校二年の主人公。

父親が死んでから日常の歯車はもう回らないと思っていた主人公だが、不安の要素もありながら楽しい日常は続いた。

しかしそんな日常も凄惨な事件により歪まされる事になる。

生徒達の指が次々奪われていくのである。教室中に澱む闇が主人公の身にも浸食していく。

指（前書き）

この物語はあくまでもフィクションです。

指

彼は自分の手の指を見つめて考えた。今までの人生で指がすべてだった。いつ頃からそんな考え方になったのか、彼は考えた。

考えてみても物心がついた時には既に、指に魅了されていた。

指とは日常の生活をする中で欠かせない部位である。

例えば食べ物を食べるために箸を持つ時、また飲み物を飲む時にカップを持つ時。

指とは物をつかむために発達しており、彼は幼くして指が人間のすべてであると考えていた。

――指。

先端にある爪、そこに浮かぶ白い半月。指には人それぞれ異なりがあり、同じ指など存在しない。

また指紋があり、個人を特定できるということも魅力の一つであった。

幼い頃の彼は、指しか眼に入らなかった。人と話す時も眼を見ず、指を見て話していた。

街中の雑踏は人間の集まりというよりも、むしろ指の集まりに見えた。

それくらい徹底して、指を眺め続けてきた。

ある時、幼かった彼は母親に「眼を見て話さない」とたしなめられた。その時から注意して眼を見て話すようにしたのだが、話している時以外は、どうしても指に眼がいつてしまう。

そんな彼であったが、月日が経つ度に指を見たいという衝動は押し殺す事が出来た。

だが次第に押し殺していた見たいという気持ちから、手に入れたいという気持ちにすり替わっていった。

そして日に日に増す気持ちは歯止めがきかなくなり、彼は赤ん坊の指を切り取った。

夕暮れの公園、話しに興じる主婦達をよそに、その赤子の指をハサミで切り取った。

主婦達は話しに夢中になっていて、彼の存在には気づかなかったようだ。

公園につんざくような赤子の泣き声が響き、ようやく主婦は気づいたのだが、時既に遅し、赤子の右手の人差し指は無くなり、それを実行した彼も一瞬にしてその場を去っていた。

走る彼の手には小さな人差し指があり、その切断面からは赤い鮮血が流れたままだった。

家に帰ると彼は赤子の人差し指をアルミホイルに包み、冷凍庫に入れた。

それで彼の心は満たされるはずだった。だが彼の心は満たされなかった。

彼が真に望んでいたのは長くて綺麗な指だが、手に入れた赤子の指は、短く可愛らしい指だったからだ。

赤子なら簡単に手に入れる事が出来ると思い、安易な気持ちで指

を切り取った。しかし手に入れてみて、赤子の指を見ても満足出来なかった。

無駄な行為だった。切り取る事はまったく意味がなかったのだ。

そうしていらなくなった指は地面に埋めた。

しかし彼はそれにこりず、まだ手に入れたいという気持ちがあった。

そうして彼は最近になって学校からホルマリンを盗み出した。

ホルマリンは殺菌効果がある液体で、指を保存するためにちょうど良い物だった。だから盗み出した。

——これで準備は整った。

しかし彼は考えた。ひたすらに考えた。顔をしかめて考え、ようやく導き出したのは、

——小指はあの子。

——親指はあの子。

——薬指はあの子。

——人差し指はあの子。

——そして最後の中指はあの子。

彼はそれぞれの顔を思い浮かべた。五指を手に入れたかったのだ。

そして彼らは彼が理想とする指の持ち主であつた。

——欲しい。

彼はそう考えると心臓が早鐘をうった。

だが彼ら相手にそう簡単に手に入れれる物ではなく、赤子の指を切った事がある彼だが、実は弱気であり、一步踏み出す事が出来なかつた。

それが出来れば、事を成す事が出来るはずだ。

彼が一步踏み出す為には、何か背中を押してくれる口実のようなものが欲しかつた。

そうして彼は考える。

——口実。

彼は終始考えてばかりであつた。

霧（前書き）

この物語はあくまでもフィクションです。

霧

黒い霧が人の形を象ったような、幻想的な何かが僕に見えるようになった。

それが声を発すると、テレビのチャンネルが映らなかった時の砂嵐のような雑音が鼓膜を揺らす。

コミュニケーションを取ろうと、これに文字を書かせた事もあるが、この世の文字ではないような文字だった。

何を言っているかも、どんな表情をしているかも、何を書いているかもわからない。

これとのコミュニケーションを取る事は、非常に困難だった。

僕はこれと二人で暮らしているのだが、何故これと二人暮らしをしているのか訊かれると、返答に困ってしまう。

これは気づいた時にはいたし、そこに当たり前のようにいたのである。

しかし朧気な記憶を思い出すと、これはちょうど僕の父が死んだ時期に見えるようになった。

あいかわまもる
——相川守。

父の名前だ。

父は誰よりも聡明で、優しかった。
いつも話し相手になってくれた父。僕と普通に接してくれた父。

しかし普通に接してくれただけで嬉しかった。

——あいかわきょうこ相川京子。

確か母はそんな名前だった。

僕と普通に接してくれない母。父が僕と仲良く話しをしているところを見ると、憤り気分を害す母。

父と母が結婚して、僕が生まれた。

それから長い月日が流れたが、母は父の事を執拗に愛していた。

だから僕と父が仲良くしているところを見ると、嫉妬していた。

母は僕と二人の時は何も話さないし、僕と眼も合わせてくれない。だから僕も話さないし、母を見ないようにしていた。

父を核にそんな生活が続いていた。

しかしそれも今からちょうど一ヶ月前に終止符がうたれた。

家の玄関で父と母が話しをしていた時が、生前の父の顔を見た最後で、それ以降僕と顔合わせしたのは死後の父の顔だった。

父が死んだ。初めに聞いた時には信じられなかった。

しかし現実残酷で、父はこうして死んでいるのである。

それは交通事故だったらしい。父が帰宅途中に横断歩道を歩いている時、車にひかれた。運転手は飲酒運転をしていて思わずひいてしまったと。犯人は今も牢獄だが許せなかった。だがそう思っても父は帰って来ない。

僕は深い絶望に苛まれた。

父という核が死ぬと僕も死んでしまう。そんな不安もよぎったが僕は生きた。

しかし母はその日からいなくなった。

荷物を残したまま僕の前から消えた。

ひよっとすると母も父の後を追って死んだのかもしれない。

そして僕は一人になった。

父が死んでから家庭は崩壊したのは、目に見えて明らかだった。

しかしその時期から、この黒い霧のようなのが見えるようになった。

黒い霧が人を象ったようなのは、夜中の零時になると決まって家を出て行く。そして明け方の六時になると帰って来た。今日が終わる時間に家を出て行き、一日が始まる時間に帰って来る黒い霧を、僕は今日と名付けた。

今日はいつも夜中になると家を出る。一度僕は今日を追跡しようと考えたのだが、夜の闇に同化してそれどころではなかった。

今日は何をしているのだろう。毎日夜中に徘徊し、人を殺める今日の姿を容易に想像する事が出来た。

しかし追跡は出来ないのです、諦めて家で待っていると、疲労して帰って来る。

僕の想像はあながち間違いではないのかもしれない。

そんな不思議な今日と僕との共同生活が始まり、一カ月が経った。

指霧（前書き）

この物語はあくまでもフィクションです。

指霧

「そうそう、それでさあいつが――」

「おい！ 佐久間、いい加減に席に着け。もう授業は始まつてるんだぞ」

授業が始まっているのも忘れ、教室の隅で話し夢中になっていた生徒が、数学の先生に咎められていた。

「はいはい、わかりました。今着きますよ」

そんな言葉のせいか、クラスの生徒達はいくぶん口元が緩んでおり、先生はそれに対しても憤慨していた。

この先生に対してやけに態度がでかい生徒は、一応僕の友達の人であり良く喋る仲である。

――佐久間隆司。
さくま たくし

高校二年にして野球部のエースを勤める彼は、態度はでかいが男気溢れる良い友達である。顔は外国人みたいな濃い顔立ちであり、そして何より背が高いのが特徴だ。

人の雑踏の中でも一際目立つ彼は、高校二年にして百八十五センチであり、このクラスの中では一番大きい。

それに彼はリーダーシップがあり、クラスの中心的な人物だった。

彼は堂々とした歩みで生徒達の机の間を通り抜け、自分の席に戻った。

僕はそれを一番前の席から眺めていた。

あいかわさとし

相川智という名前のせいか、いつも決まって窓際の一番前の席に位置どっている僕だった。

しばらくしてクラスの委員長が「起立、礼」としてから、授業が始まった。

眠気を誘う授業だったせいか、時間中の記憶が途切れていた。気がつけばどうやら休み時間に入ってるらしい。教室は騒々しく耳をろうした。

まだ眠気の取れない眠気眼で前を見ると、瀬川さんがいた。

「また寝てたの？　だらしのないな　サトっちゃんは」

「うん、まあね」

彼女は何かと僕にちよっかいをいれてくる。だらしがないという事を肯定して彼女を見た。

せがわななみ

——瀬川七海。

彼女の性格は男勝りなところはあるけれど、顔立ちは可愛い女の子であった。部活は何をやっているか不明だ。

何故なら彼女とは昨日喋るようになったばかりだからだ。

「昨日ゲームしてたからかな…。まだ眠いよ」

「へえ、サトっちゃんもゲームするんだ。で、どんなゲーム？」

彼女は僕がゲームをするとは思っていなかったのか。少し驚いた様子で目を丸くしていた。

しかし実際彼女の予想は当たっている。僕は実はゲームなど生まれてこの方一度もした事がなかった。だけど咄嗟に嘘をついてしまった。

何故なら夜中の街を徘徊していたなんて、とてもじゃないが言えなかった。

その目的は今日を追跡しようとしていたのだが。

「どんなんて。べ、別に普通のゲームだよ。ごく一般的な…」

「ふーん、怪しい。夜遅くまでするゲームだなんて、ひょっとしたら…」

「ひょっとしたら何だよ」

「…まあいいわ。じゃあね」

そう言って自分の席に戻ろうとしていた。

「おい！ 最後まで言えよ。ってか何しに来たんだよ」

彼女は一度振り返り、「からかいに」と笑顔で言い席に戻っていた。

昼休み、食堂で買ったパンを教室で食べていた時、

「お前なんであの子と仲が良いんだ？ まったく抜け駆けしやがって、フェアじゃないよなあ」

僕が買った菓子パンを一口かじり、長瀬が言った。

「フェアじゃないって、別にそんな事はないよ」

「いいや、フェアじゃない。俺なんかサッカーやってるのにお前みたいにもてた事ないぜ…」

そう言った後、彼は眼鏡を拭きながら考え込んでいる様子だった。

——長瀬誠司。
ながせせいじ

彼は中性的な顔立ちをしており、銀縁の眼鏡を掛けている。彼はサッカー部でサッカーをする時は外しているが、サッカー以外の時はいつも銀縁の眼鏡をかけていた。

彼も僕の友達であり、一番仲が良く、彼とはよく気が合った。

「その点お前は良いよな。顔が良いから部活しなくても、女子が近寄ってくるし」

彼は淡々と愚痴を呟いた。

「長瀬まで僕をからかうなよ」

「またその僕っていうのも、気取ってなくて好感度いいし」

それに対しては無言の返事をした。すると長瀬は「俺も僕って言うのかな」とか呟いていた。

僕は自分の顔を鏡であまり見ないから、自分がどんな顔しているかあまり知らなかった。

だから長瀬が言っている事は信じられなかった。自分の事を僕って言うのは幼い頃からの単なる慣習で、それが直らず今も使い続けているだけだ。

「で、彼女とはどんな関係なんだ？」

突拍子もなく、急に質問されて驚いた。

しかし彼女との関係を訊かれても、昨日知り合っただけの薄っぺらい関係である。

「別に、長瀬が思ってるような関係ではないよ」

「はつきりとは言わないんだな…」

食べた菓子パンの包装を丸め、長瀬は呆れ顔だった。

「いや、本当僕もわからないんだよ。彼女の事は」

「ふう〜ん、でもいいよな瀬川さん。クラスの中でも、群を抜いて可愛いもんな」

確かにそれは否めない。瀬川さんの容姿はあまりメイクというものをしてないのに、それでもずいぶん可愛らしかった。

「まあな、それよりも次の授業、美術だろ？ いいのかのんびりしてて」

「やばっ、完全に忘れてた。遅れたらあの先生に殺される」

「それだけで、殺される訳ないだろう」

だいいち、あの先生が怒ったところさえ見た事が無い。

あの先生とは岩本先生のことだ。

岩本先生は美術兼僕らの担任の教師で、教師にしては若く年は三十歳くらいで眼鏡をした先生だ。

長瀬は急いだ様子で自分の席に戻り、美術のセットを持ってきて僕と一緒に美術室へと急いだ。

木造アパートの階段を上り、家に入った時には日は傾いでいて、夕暮れ時だった。

寝室に入ると布団が膨らんでおり、今日がまだ寝ている事がわかった。

「今日、まだ寝てるのか？」

布団がもぞもぞと動き、僕の耳にはかまびすしい雑音としか捉え

る事が出来ない声が聞こえた。

——訊いたのが間違いだったかな。

制服のボタンに手を掛け制服を脱ぎ、ジャージとTシャツという部屋着に着替え、居間でくつろいだ。

すると寝室からノロノロと今日が居間に入ってきた。

夜行性と思われる今日がやっと起きたらしい。するとまた歩き、玄関のすぐ隣にある台所に向かっていった。

そういえば母が消えてから誰が料理をしているのかというと、今日がしているのだった。

文字などは解読不能な文字を書くのだが、料理の場合は意外に食べられる料理を作るのだ。しこうして味もとても美味なのだ。

今日はいつの間にか買ってきている材料を冷蔵庫から取り出すと、慣れた手つきで調理を進める。

しかし材料はどのタイミングで買いにいつているのだろう。いや買いに、ではなくて取りに、の方が正しいのかもしれない。

居間でくつろいで待っていると、ここまで美味しいそうな臭いが届いた。

僕は鼻翼をヒクつかすのをためらわず、晩飯時を心待ちにした。

小指（前書き）

彼が切断した小指を握りしめ、街中を走る。

走っているせいで息が上がっているのか、それとも興奮のせいで息が上がっているのか：

そんな事など、どうでもいいとするかのような速さで、街中を走り抜ける。

小指

休み時間、窓越しから空を眺めると、ビルとビルの隙間に見える空は曇天で、気持ちも天気の影響され気分も鬱々としていた。

「曇ってんなあゝ」

顔を右に向けると、長瀬が前屈みに空を見ていた。

彼はいつの間ここにいたのだろう。今日も銀縁の眼鏡を掛けている長瀬は、顔を曇らせていた。

「うん。もうすぐしたら雨も降り出すかもな」

そう返事すると長瀬が僕の隣の席に、自分の席であるかのように座り、「まじで？」と一言。

「それより、その席に座っていいのか？ 授業もうすぐで始まるのに」

「そんなの別にかまわないよ。俺の席も座られてるし」

ほらと言って彼が指を指した先には生徒達がたむろしていて、何やら話し込んでいるらしく、時々笑い声が上がっていた。

「確かにな。でもそこ女子の席だよ」

「それはむしろ喜ばしい事だろ。ていうかこの席、川本だろ？」

「ああ、確かそんな名前だったかな」

川本という女子は僕の隣にいるのだが、休み時間は読書、授業中にも読書といったバリアを張り巡らしたような存在だった。

「こいつなら今日は休みだったじゃん。ホームルームの時にいなかったし」

「ああ、そうだった。ぼーっとしてて気づかなかった…」

朝から空ばかり眺めていたせいか、全然気づかなかった。

何故空を眺めていたかという、傘を持ってきたいなかったからだ。

「お前にも抜けてるところがあるんだな」

長瀬はどこか嬉しげだった。

「ああ、抜けすぎてるくらいだよ」

「ほう。あいつくらいか？」

そう言うとは彼は一番後ろの席に座っている、毛が薄い生徒を指差した。

「その抜けてるじゃないし、彼に失礼だよ。指おろして」

慌てて長瀬の腕を持ち、腕を下げさせた。

「うけると思ったのにな」

彼は悔しそうに頭を掻いた。

「いや本当、失礼だから。笑えないよ」

「まあいいや、じゃあもうすぐでチャイム鳴るし、席戻るわ」

「おう」

そうして席に戻ると思ったのだが、

「あっそういえば、井川。今日部活終わったらお前の家行くわ」

長瀬は僕の後ろの席にいる男に話し掛けていた。

——井川駿いがわしゅん

彼も長瀬同様サッカー部であり、よく長瀬と話しているところを見た事があるが、僕は一度も話しをした事がない。後ろの席なのだが。

しかし彼は人を寄せ付けない、突っぱねたような振る舞いをしそうなくらい、見た目が暗い感じなのだ。

「ああいいよ。でも何しに……」

井川はしゃがれた声を出した。

「まあ借り物だよ。借り物」

長瀬は自分の用件を済ませると、そそくさと席に戻っていった。

何とも自分勝手なやつだと友達ながら思った。

そして単調なチャイムの音が鳴り、先生が入って来た。

翌日の朝のホームルームで岩本先生の話しに耳を傾けながらだったが、異変に気づいた。

川本さんの右手に包帯のような白く巻かれていた。彼女はそれを隠すようにポケットに手を入れているのだが、彼女が席に着くときに見てしまったのだ。

——何だろう？

怪我でもしたのだろうか。そんな疑問が浮かんだ。

しかし手の事も注目するべき点なのだが、彼女の形相の方が異常に思えた。

多少の生徒はそんな彼女の様子に気づいたのか、一瞥をくれる生徒がいた。

しかし先生はそんな彼女の形相には気づいておらず、淡々と朝のホームルームを進めていた。

ホームルームが終わり、授業が始まるまでの間に少し逡巡したが、彼女に話し掛けてみた。

「ごめん。余計な事だと思うけど、どうしたの？」

彼女の方に椅子を近づけて問いかけた。

しかし彼女はさらにすごい形相になり、顔を引きつらせ、小刻みにかぶりを横に振るだけだった。

——これ以上訊かない方がいい。

異常な彼女の様子を見て僕は直感した。家庭の事情なのかもしれない。そうだとあまり深入りしない方がいいのだと思った。

授業が始まった。

だが彼女は読書をせず、ただ茫然としていた。

すべての授業が終わり、教室中に賑やかになっている時に肩をつつかれ、顔を向けると川本さんが僕を見ていた。

「…はなし、たい」

恐る恐るといった感じに喉をふるわせていた。僕はそれに対して「ん？」と眉をあげた。

さらに彼女は伏し目がちに、

「話したい」

先ほどよりは強く、もう一度呟いた。

「うん、わかった」

朝の様子と符合して、僕は頷いた。何か相談事でもあるのではないかと。

帰りのホームルームが終わり、川本さんと一緒に教室を出た。そして人目が見つからない屋上に連れたった。屋上には僕と川本さんの二人しかおらなかったのだが、あえて隅の方の緑色のフェンスまで行き、事情を訊いた。

「どうしたの？」

フェンスにもたれるようにして訊いた。屋上から街を見ると、ビルなどの建物でいっぱいだった。

「……」

質問には返事をしなかったが、ポケットに入れていた右手を恐る恐る出した。

やはり見間違いなどでは無かった。やはり右手には包帯をしているし、

「えっ……」

思わず声が洩れた。

——何だ？

あまりに不自然であった。何故なら右の小指のところが、手の甲からだ和小指が無いように見えたからだ。

「ちょっと手を見――」

彼女の手に触った瞬間はねのけられ、フェンスに体をきしませた。

「やめて！」

悲鳴にちかいような声が屋上に響き、彼女が僕と距離をとった。

「うっ、でもそれ――」

視線を右手に合わせ、再度見た。だがやはり小指が見えない。たが折り曲げているという可能性も否めない。

「――わかった離れるから、何があったか話してくれる？」

フェンスを背にしていたのだが向きを変え、彼女と十歩分くらいの距離をあけた。

空に浮かぶ曇天が頭上をずいぶんと流れ、屋上に強い風が吹き、彼女の長い髪がなびいた。

そしてその時に彼女は胸の前まで手を上げ、僕に手の平を見せた。僕が思った通り、そこには小指は見えなかった。小指のあたりは包帯で巻かれているのだけれども、膨らみがなかった。

彼女は小指を失ったのだ…。

屋上で彼女はとつとつと語り出した。

それは一昨日の帰宅途中だったらしい。いつも通り家に帰っていると、生徒手帳を落としてしまったみたいだ。そして拾おうとした瞬間に後頭部に衝撃を受けたと、しかし彼女は氣を失わなかったのだが、そのまま地面にうつ伏せの状態になったと、そしてそこらが凄惨であった。

語っている途中に彼女は突然泣き出した。僕はそれを眺めるしか出来なかったけど最後まで聞いた。

彼女は「切られたの」と泣きながら一言。

しかしその一言で充分であった。

「切られたの」の一言にどれだけの悲しみ、苦痛などの感情が凝縮されているのかを悟った。

そしてその言葉を聞いてから、僕は彼女との距離を詰めた。

僕にはこんな些細な事しか出来ず、悔しいのだが、彼女の側まで近づいた。

そしていつの間にか振り出した雨に紛れて、そっと涙を落とした。

ずぶ濡れの中、川本さんを家まで送った。

彼女は傘を持っており僕の少し前を歩いていて、僕は雨の中を歩いた。

そして見送った後、自分の家に帰り浴槽に浸かった。

手にお湯をすくい、考えた。

川本さんは去り際にこんな事を言ったのだ。指を切られる前の学校で、机の中に二つ折りのルーズリーフが一枚。そこに乱筆に書かれた小指という文字。ようするに、

——示唆されていたのだ。

しかしそう考えるのは早計かもしれない。
だがたまたま入っていた何て有り得るだろうか。

——有り得ない。

彼女は親にはその事を言っているだろうし、警察も動き出しているだろう。

僕なんかが首を突っ込む必要は無いのかも知れないが：

風呂を早めに出て、台所で調理している今日を見た。

今日が包丁を持って調理をしている。

それを見るとやはりこの事件について深く足を入れないといけないな
いと思った。

親指（前書き）

彼はルーズリーフに親指という文字を書いていた。

その文字は彼の心の中にある欲求を体現したようなもので、歪み、読むことは安易ではなかった。

彼の片隅には切断された小指が飾られていた。ホルマリン漬けにされたそれは小瓶に入れられていて、大層大事に扱われていた。

そして彼はそれを見ると口元を歪ませ、満足そうな顔をした。

親指

翌日の授業中に隣の席を一瞥すると、川本さんが必死に左手で板書をうつしていた。

彼女は元は右利きだったからか、ぎこちない様子でノートに刻まれる文字は、小学生が書いたような文字であった。

何故彼女が左手で文字を書くのか。それは彼女なりの考えがあると思う。多分小指の無い右手を机の上に出し、生徒達に奇怪な目で見られるのが嫌なのであろう。右手はポケットに入れたまま授業に臨んでいた。

クラスの中の川本さんの印象は極めて浮いていると思う。彼女が話しをしているところなんか見た事も無いし、彼女の話し相手はいつも本のように思えてならない。

毎日本と語り合うみたいに本を読むのである。

そんな彼女が本ではなく、僕を頼ってきた。

そしてその事が僕を煽り、駆り立て、事件に首を突っ込む理由になったともいえる。

僕は犯人を探そうとしていた。

しかし探そうと思えど、何の手掛かりもなく、非常に困難を極めていた。

休み時間に考え込んでいると、僕に声が掛かった。

「おい、さとし。何をそんなに考えてるんだ？」

見ると、外国人みたいな顔立ちの佐久間が立っており、僕を高いところから見下ろした。

「ああ佐久間か。…ちよつとな。色々あって」

「何だ悩み事か、そんな時は体を動かしたらいいんだ。そしたらスツとするぞ」

そう言うとは彼は自慢の投球フォームを披露した。

「まあ確かに、そうかもしれないな」

「そうだよ。あつ、でもさとしては部活何も入ってないよな？」

それに対して「入ってないよ」と肯定すると、彼が執拗に野球部に入部する事を勧めてきた。

「出来ないよ。運動神経なんか、まんまり無いし…」

自嘲ぎみにそう呟いたが、

「また謙遜して、色んな部活から勧誘されてるくせにな」

けしてうそぶいている訳では無かった。僕は体を動かすのはあまり好きではないのだ。でも確かに色んな部活からの勧誘は受けていた。

それに対しては「まあそうだけど」と淡泊に応えた。

午前の授業が終わっての昼休み、いつものように食堂にパンを買いに行こうと教室を横切ろうとした折りに、たまたま見てしまった。一枚のルーズリーフを片手に「何だこれ？」と呟いている生徒を。

僕はいてもたってもいられなくなり、彼に近づいた。

そんな彼は田中昇一たなかしょういちといい、バスケット部であり、爽やかな男だった。

「どうしたの？」

そう言い彼の背後から近づいて、ルーズリーフの書かれている内容を覗き見た。

——何て書いてあるのだろう。

手紙の内容は少し距離があったから、文字が判然としなかった。

「ああ、相川か。

いや何か机の中にこんなの入ってて、何だろう、何書いてるかわからないや」

彼はどうせ誰かの悪戯だろうと言い、ルーズリーフを僕に渡してくれた。

ルーズリーフに書かれてる文字は、まるで書いた者の心を映しているように乱筆な字だった。

目を凝らしてじっくり見ると、鉛筆で親指と漢字で書かれているのがわかった。

僕はすぐにあの事と短絡させ、暢気に平和づらをしている彼に、

「誰が机の中に入れたかわからないの？」

そう訊いたが、彼は知らないと言を振った。

——また起こるのか？

川本さんが右手の小指を失った日にも、小指と書かれたルーズリーフが机に入っていたという。

そして彼も同じようにして親指を失うのか。さらに犠牲者を出してしまうのか。僕は去り際に彼に忠告した。

「帰り道に注意したほうがいいよ」

しかしそんな忠告も彼は耳を傾けず、適当に相づちをうっているように思えた。

だからもう一度、「注意して」と簡単にかつ、真意に迫って忠告した。

彼はそんな僕に驚いたようにたじろぎ、目を丸くして「おう」と一言返事した。

教室を出て、長ったらしい廊下を歩いて食堂に行くと、生徒達でごった返しになっていた。

確かに食堂にパンを買いにくる生徒は多い。

いざ勇気を出し群がる生徒達の雑踏をかき分けて、食にありつこ

うとしていた時、見覚えのある生徒が目の前にいた。後ろ姿からでも彼女ということがわかった。

「あ、瀬川さん」

窮屈な思いをしている彼女は振り向き一度目を丸くして、

「ん！ サトっちゃんじゃん」

何故だか嬉しそうな表情だった。

「瀬川さんもパンを？」

「うん、でもこれだと買えそうにないなあ。：あ、そうだ」

何か閃いたらしく、「あっちあっち」と僕を押しながら生徒達の雑踏を抜け出た。

「せっかく並んでたのに：」

あれでは並んでたと言いつつ表すのは無理があると思うが、自然に言葉が洩れた。

「まあいいじゃん。それよりもここで食べよう」

そう言うと言事を待たずさらに僕を押して、「きつねうどん一つ」と食堂のおじさんに注文し、その後「何にする？」と僕に訊いてきた。

「じゃあラーメンで」

特にどれが食べたいなどの願望は無かったので、一番無難な物を注文する事にした。

そう言っていると、瞬く間に目の前にきつねうどんとラーメンが置かれていた。

食堂で料理を注文すると、そんじゃそらのファーストフード店よりも迅速に出てくるのだ。

驚きながらもラーメンを持ち瀬川さんと並んで歩き、テーブルに向かい合って座った。

「瀬川さんも食堂利用するんだね？」

今まで食堂で会った事が無かったのでこんな事を話題にしてみた。

「うんまあね、今日はたまたま弁当をおうちに忘れたからね。…でもびっくりした、こんなに食堂が混んでるとは」

「確かに今日は混んでるな。いつもはもうちょっとマシだけど」

ラーメンを一口啜ると、まだ堅麺で噛むと歯に弾力を感じた。

瀬川さんも僕に倣ってうどんを啜っている。そんな食べている時の瀬川さんも不思議と絵になるようだった。

「ふうーん、そうなんだ。それよりそれ一口もらえる？」

「ん？ あ、別にいいけど…」

すると、僕のラーメンとうどんを取り替えられた。彼女が先ほど

まで食べていたうどんが目の前に。少し食べるのをためらっていると彼女は何の気も使わないでラーメンを食べていたので、僕も気にせず食べる事にした。

食べた後また取り替えると、チャーシューが一枚消えていた。

「チャーシュー…」

悲しげな声を出すと、瀬川さんは鼻でふふと笑い、

「あぁごめん、つい食べちゃった。油揚げ半分あげるから許して」

油揚げを割り箸で丁寧に半分にしてもらった。

「別にいいのに。でもまぁ遠慮なくいただくよ」

油揚げを食べてると何故だか瀬川さんが笑顔で僕を眺めていた。

「それにしてもサトっちゃんが食べてると、何だか、絵になるね」

それは僕が彼女に対して抱いた感想だったが、まさか彼女に言われるとは…

——僕が絵になるなんて、そんな大仰な。

居心地の悪さを感じ居住まいを正して、外を眺めるようにして視線をそらした。

すると、長瀬がちょうど僕たちの隣を通り過ぎるところだったので、助けを求める形で長瀬に声を掛けた。

「長瀬！　ちよつと」

手招きして相席を頼むと彼は驚いた顔で隣に座ってくれた。長瀬は「悪いね、邪魔するよ」と一度瀬川さんに愛想を振りまき、

「何だよ、お前もしかして、俺に見せびらかしたいのか？」

開口一番僕に非難を浴びせてきた。

「いや、違うけど…。それより長瀬はこんなところで何してるんだ？」

「いや、それは俺のセリフだよ。二人で何してるんだ？」

僕と瀬川さんを交互に見て、質問を返された。瀬川さんの方を一瞥すると何故か不機嫌であった。

「…別に食べてるだけだよ」

「ふーんまあいいや。…あっそうだ、瀬川さんって俺と選択授業いっしょだよな。よかったらノート貸してくれる？」

語尾を上げて唐突に頼み込んでいた。確かに彼と彼女は選択授業の日本史を専攻していて一緒だった。ちなみに僕は物理なので別々になる。

「うん、いいよ」

暫く間があいてから、瀬川さんが返事をした。長瀬は前の授業ノ

ートを写してなかったのか、お礼を言ってから、救世主を見るような眼で瀬川さんを見ていた。

一方的に長瀬に喋らしていたので、食べることに集中出来たおかげかすぐに食べ終わり、瀬川さんとはそこで別れた。

教室までの廊下を長瀬と歩いていて、あの事について話題にしてみた。

「長瀬、田中って知ってるか？」

少し前を歩いていた彼が振り向き、

「ああ彼か、あのバスケ部のやつだろ？ 何でそんな事を訊くんできた？」

「ああ、その田中の机に変な手紙が入っていたらしいんだよ」

僕がそう言う「手紙！？」と素っ頓狂な声をあげた。

「で、中身はなんて書いていたんだ」

少し間をあけてから「親指」と言うと、長瀬が不思議そうな顔をした。

「何だ…どうせただのイタズラだろ」

聞いて損をしたみたいに呆れた声を出して、彼が前に向き直った。

「いや、断定は出来ないけどイタズラではないと思う…」

長瀬には川本さんの事を話そうと思った。彼女もその手紙が机に入っていた日に、その内容と同じ部分を失ったという事を。

「どういう事だ…」

もう一度僕に視線を戻して、怪訝な顔を覗かせた。

「実は川本さんにもそのような手紙が入っていたんだよ。三日前に…で、その日に小指を取られた…」

そこまで一気に喋ると彼は顔色を変えて立ち止まった。

暫く間があき、

「小指を…、なにが、どういうことだ？」

「言葉の通り、小指を何かで切られたんだよ。…だからこれはただごとではない騒ぎだ。田中の親指が切られてしまうかもしれない」

「でもどうしろと？」

周りを歩く生徒達とは隔離されたみたいに、僕たちは静だった。

「それは僕もわからない。彼に忠告はしたけど、それだけでいいのか…」

「…彼は親指を取られるかもしれない。それは今日中か？」

無言で頷くと、

「今日中に取りられるとすると、帰宅途中にやられるかもしれないな。」

：そうだ、バスケットとサッカー部が終わるタイミングだいたい一緒だから、田中と一緒に帰る事にするよ」

良い考えであった。僕は今日を見張るために家で居なくちゃいけないので、長瀬の提案はとても良かった。

「わかった。頼むよ、長瀬」

僕達は再び廊下を歩きだした。

心配だった。不安は授業の度に重なり、何をやっていたかわからないまますべての授業が終わった。そのまま足早に家に帰り寝室に駆け寄ると、今日が当たり前のようにそこにいた。

だが安心はしきれない、見張らないといけないのだから。

暫くテレビなどを見て暇を潰していると夕飯時になった。しかし今日は起きてこずに寝室に閉じこもったきり出てこなかった。

なので近くのコンビニに今日と僕の二人分の食事を買いに出かけた。

外に出ると物騒なこの街をパトカーが横切るのが見えた。街灯が多くても赤の点滅の光は眼に印象深く映り、眼を瞬かせた。

やはり警察も捜査をしているんだろう。

そう考えながらコンビニに入ると、近所の知り合いのおばさんが近寄って来て「この前あなたのお母さん見たわよ」と僕があまり興味の沸かない話をしてきた。

適当に愛相をふりまき、お別れをした。

母はまだこの街にいるらしい。しかしあまり関心を持てなかった。父がこの街にいるとかだったら関心を持てるけど：いやしかしそれは有り得ない。

考えるのをやめて適当に品を選び、家に帰った。

帰ると今日が居間で座っていた。僕が居間に入ると表情の読めない顔らしき箇所を僕に向け、何だか僕に話しかけてきた。

しかし相変わらず何を言っているかわからず、耳をろうすくらいの雑音が聞こえるだけだった。

「はい、これ弁当」

テーブルの上に焼き肉弁当を置くと、今日が食べ始めた。僕ももう一つの焼き肉弁当を食べながら、考え事をした。

――まさか僕が出かけている隙に：

そう考えたが、さすがにそれはないかと思い直す事にした。

翌日登校しての授業前の休み時間、長瀬が申し訳なさそうに僕の席に近づいてきた。

「悪い：昨日部活が遅れて、田中と一緒に帰れなかった」

――まずい。

振り返り見ると、案の定廊下側にある彼の席は空席になっていた。
：また切られたのか。

薬指（前書き）

彼が爪切りを持って爪を切っている。

カチカチという爪を切る時に出る音がリズムを刻み、部屋中に響いている。

そして終わったかと思うと、またカチカチという音が聞こえる。

彼は小指の爪を切っていた。しかしそれは自分の爪ではない。

いや、今は彼の爪となっているのか。

小指の爪を切り終わると次は親指の爪を切り始める。

それもまた彼の爪なのであろう：

薬指

「長瀬：何で一緒に帰らなかったんだよ？」

ほとんどの生徒が教室で席に着く中で、僕と長瀬は廊下にいた。

「だからさっきも：悪い。どうしても抜け出せなかったんだ。でも今日田中は――」

「いないよ。：休みだ。まあおそらくはもう切られている」

彼の親指は切られた…。

その確信を得たのは田中が休むというのは、あまり見たことがなかったからだ。

だが、まだ推測の域は出ない。彼の無事を祈るだけだった。

その後は長瀬が黙り込んでしまい、責任を感じているような様子だった。

僕たちは授業の始まるチャイムで教室の中に戻った。

授業が始まってからは、田中を無事を祈り、田中の事を考えた。

彼が親指を失うと彼のバスケット人生は大きな支障をきたすだろう。もう正確なシュートも、パスも投げる事は出来なくなるかもしれない。そう考えると彼の親指を切った犯人に憤りを覚えた。

しかしまだ仮定の話だった。彼の親指は切られていない。そう祈るだけで、現代文の授業は終わった。

休み時間になると、長瀬が僕の席まで近づいてきた。

「本当に悪い、おれどうしたら…」

暗い顔をしているところを見ると彼も田中のことを考えてたみたいだ。

「まあそれよりも、無事を祈るしか無いな。：そういえば、明日は土曜日だよな？」

「ん？ ああそうだな」

明日が土曜日だと彼の安否が確認できない。なぜなら彼の連絡先を知らないし、住所も知らないからだ。

でもしかし長瀬ならスポーツ繋がりで連絡先を知っているかもしれない。

「長瀬、田中の連絡先わかるか？」

「いや連絡先はわからないけど、住所ならわかるよ」

長瀬が最近、田中の家に遊びに行ったことがあるらしい。部活の知り合い達と部活終わりにゲームをしに行くといった形で、

「そうか。じゃあ今日の帰りに田中の家を探ねに行こう」

「わかった。なら今日は部活は休むよ」

彼もやはりよほど心配しているようだ。

「いいのか？ 部活休んで」

そう訊くと彼は「大丈夫」と当然のように言った。なら二人で行

こう、行って確かめよう。この事件に終止符を一刻も早く打たねばいけないのだから。

授業中に何度抜け出して田中の家に訪問しようとしたか、それはもう数えられないくらいであった。

昼休みも長瀬と一緒に抜け出そうと考えたが、常識が邪魔をしようと思いとどまることになった。

夕暮れさえ訪れていない、午後三時四十分に長瀬と共に街路樹が整然と立ち並ぶ、街路を歩いていた。

いつもよりも言葉少なになり、自然と歩調も速くなっている。

普段なら長瀬がバカをやって僕を笑わせにくるのだが、その長瀬がほとんど声を発さない。

耳に聞こえてくるのは、通り過ぎる人の話し声と、車の走行音。しかしそんなのはどうでもいい。いま意識下にあるのは田中の安否について、ただそれだけだ。

暫く無言のまま歩くと、住宅街に差し掛かり、やっと長瀬が声を発した。

「もうちょっとだ。確かこの道を真っ直ぐ行った突き当りが、田中の家だ」

しだいに狭くなっていく隘路^{あいろ}を突き進むと、視界が少しだけ拓け、目の前に高級そうな一軒家が建っていた。

「ここか？ 長瀬」

そう訊くと長瀬は無言で頷き、インターホンを押した。だがしかし、いつになっても応答をする気配はないし、玄関の扉が開くこともない。暫くしてから長瀬がもう一度インターホンを押すと、二階にある窓のカーテンが少し開き、遠目から見てもわかるくらいの末生りな、元氣のない顔を覗かせた。

――田中だ。

彼の部屋と思われる、窓から顔を覗かせているのは明らかに田中であつた。

カーテンが小刻みに揺れ始める。彼の手が震えているからだ。暫くカーテンが波打つと、彼は顔を引っ込めた。

もうこの反応で十分ではないのか。もう確信をしてしまいかけている僕がいた。

長瀬も田中のその反応を見て気づいたのか、どこまでも自分を責めているような顔で下唇を噛んでいた。

「お、俺のせいで…。俺の…」

長瀬が小さく嘆く。

「…せいで。俺が――」

「そうじゃない！ 全部僕の責任なんだ。長瀬は何も悪くない」

…何も悪くないんだ。責任があるとしたら僕の方だ。何もかもが甘かった。長瀬に田中との同行を求め、自分は家で今日の見張り、それも完全に見張っていたとは言わない。短時間だが今日を野放し

にした時間がある。

しかし今日が犯人だなんて断定などできない。全てが空回りし頭が痛くなってくる。

僕たち二人はそのまま棒立ちになったままになった。

そしてまた同じ道を戻ろうと踵を返した時に、カラカラカラと、滑りが良い窓を開けた時の音が聞こえた。

さらに振り返り見ると、田中が声を発した。

「：話を聞いてくれるか？」

体育会系の彼にしては弱々しく、小さな声をあげる。

話を聞いてくれるかといった彼だが、一向に降りてくる気配がない。この場で話すということか。もし僕が彼と同じ立場に立たされたとすると、僕も彼同様の方法を取ったであろう。

彼が話を始める。呟くようにして自分ひとりに言い聞かすような小さな声で。

僕と長瀬は相槌など打たずに、ただ話を聴いていた。そうしなければ彼の声が聴こえないからだ。

時々彼の声が震える。話してるうちに思い出してしまうのか。前置きの段階で随分と聞こえ辛くなってしまっているのだが、そのままさらに傾聴した。

「まさかあのルーズリーフに書いてあることが…」

田中が呟く。

ルーズリーフに親指と単語だけが書かれただけでは、何かの悪戯に捉えてしまうだろう。僕も川本さんの話を聞いていなかったら何のことかわかりはしなかった。

あの時は短絡的な考えだと思っていたのだが、そうではなかったらしい。

「…あの時相川があんなに注意してくれてたのに」

もしものことを想定して忠告をした。そして次に確定的な言葉を発した。

「親指が…」

さらにもう一度「親指が」と呟く。

その瞬間わかつてはいたものの、心臓を鷲掴みにされているような感覚に陥った。

「…無くなった」

最後の語尾の方は聴こえないくらい、小さく、震えていた。

長瀬はというと、何も言えず上ではなく下を見つめていた。

彼が親指が無くなった経緯を話す。

部活終わりの帰宅途中に襲われたと、これまた川本さんと同じように、人気が少ない歩道橋の階段を下りている最中に後頭部に強い衝撃、そこで気絶をしたらしい。そこから目が覚めると親指が無くなっていたらしい。窓から少しだけ右手を突出した。そこには川本さんと同じように包帯がしてあった。僕はその場では同情しかすることが出来なかった。

しかしこの場で誓う。こんな事はこれで終わりにするんだ。こんな悲しいのはもう味わいたくない。

いつのまにか握りこぶしになっていた拳を解いて、長瀬に向き合った。

彼もまた僕と同じように拳を強く握りしめており、銀縁眼鏡越しから見た彼の眼は強いものになっていた。

長瀬とは田中の家の前で別れた。帰宅途中でごった返しになっている街路をひたすら人の流れに身を任せる。人の波の一部になり、同じ速度で、同じ歩調で歩く。

空は朱く血塗られたような、夕空。夕陽が人の波に映っているかのような錯覚を味わった。

今この町は朱い。この町のどこかに潜むこの朱さの根源はどこだ。なぜ指だけを奪う。

何が望みなのだ。

ちっとも判然としない。気持ちが悪くなってくる。

とにかく何処かにいるのだ。

前を見ると上下する人の後頭部、左右を見ると人の横顔、周りを見渡しながら歩いていると携帯電話が震えた。

携帯の画面を見ると、瀬川七海という文字が表示されていた。そういうえばこの前連絡先を交換していたのだった。

「はい、もしもし」

歩きながら電話に出ると、

『あっ！　もしもしサトちゃん？　』

瀬川さん特有の丸みのある、柔らかい声が携帯を通して聞こえた。

「うんそうだけど。…どうしたの？」

『いや、今部活終わったところなんだけどさ、暇なんだよね。…それでちょっと遊ぼうみたいなさあ』

言い辛いことだったのか、携帯越しでも彼女が頭を掻いている光景が想像できた。

――暇。

今僕は暇なのか、暇ではないのか、どっちだろう。
暫く無言で電話を繋げていた。

こんな気持ちで遊ぶという選択を選ぶのは嫌なのだけでも、逆を取ってそれもいいかもしれない、鬱然としたこの気持ちも遊ぶことによって払拭してくれるかもしれない。

「…うん、いいよ。それで今からだよね？」

『うん今からだよ。私今歩いてるんだけどね、タコ公園の近くなんだ。あそこで待ち合わせということでもいい？』

タコ公園、正式の名称は全く違うのだけでもタコの滑り台があるということでもそう呼ばれている。

その場所なら結構近いので、そう時間はかからないだろう。

「うん、わかった。今僕もすぐ近くを歩いているから、あと五分くらいしたら着くよ」

『え…そうなの？ でも何でそんなとこにいるの？』

「何でもいいだろ、じゃあ今から行くから切るよ」

そう言い残すと一方的に通話を切った。さっきから周りを歩いて
いる人たちの視線が痛いほど突き刺さっていたからだ。

彼女に会ったらこっぴどく訊かれるかもしれない。まあそれも楽し
そうだ。そんな風に当たり前の日常が続いてくれたら。

そういえば瀬川さん、部活と言ってたよな。彼女が何の部活に入
っているかも未だに知らないから、まず会ったら僕の方から訊いて
やろう。

それもまた楽しそうだ。

そこから歩いて六分くらいでタコ公園に到着した。平日の公園は
人氣が全くと言っていいほど無い。休日になると家族連れの子供た
ちで溢れるくらいいっぱいになっているのだが…。

到着して公園を眺めると真ん中に大きなタコの滑り台が設しつらえてあ
る。

滑り台とブランコしか無い公園は遊具のバリエーションが少ない
わりに、そんなことを感じさせないイメージがある。

それはタコの滑り台のインパクトが強いからだろう。

公園に入り辺りを見渡してみても瀬川さんはいない。

仕方がないのでタコの滑り台の階段を上った。すると見えるもの
があった。

一人。

さっきまではこの公園には僕一人だけだと思っていたのに。

滑り台の上にと確かにそれは見えた。

何故さっきまでは見えなかったのか、それはこの滑り台が壁とな
っていて見えなかったただけだ。

見えてしまった。その瞬間驚愕した。

タコの滑り台の上で足がすくみ、暫く動けないでいた。
だから声を出した。

「瀬川さん！」

自分が発した声で、足の震えが止まり階段を駆け下りた。

——瀬川さん、何で倒れてるんだよ。何で…。

「何で…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7049r/>

指霧

2011年5月2日13時02分発行